

島根県立大学 総合政策学会
『総合政策論叢』第35号抜刷
(2018年3月発行)

〈研究ノート〉

インド古典哲学文献の写本資料について

——『シュローカ・ヴァールティカ』関係写本の現状——

大 前 太

〈研究ノート〉

インド古典哲学文献の写本資料について

——『シュローカ・ヴァールティカ』関係写本の現状——

大 前 太

1. はじめに
2. ŚVおよび諸注釈書の刊本
3. ŚVおよび諸注釈書の写本
4. おわりに

1. はじめに

ここで取り上げるインド古典哲学文献とは、インド六派哲学の一角を占めるミーマーンサー学派のクマーリラ作『シュローカ・ヴァールティカ』（Ślokavārtika、以下ŚV）とそれに対する4種の注釈書——ウンベーカー作『タートパルヤ・ティーカー』（Tātparyatīkā、以下TT）、ジャヤミシュラ作『シャルカリカー（・ティーカー）』（Śarkarikā (tīkā)、以下ŚT）、スチャリタミシュラ作『カーシカー・ティーカー』（Kāśikatīkā、以下KT）、パールタサーラティミシュラ作『ニヤーヤ・ラトナーカラ』（Nyāyaratnākara、以下NR）——およびKTに対する注釈書であるパラメーシュヴァラ作『カーシカー・ヴィヤークヤーナ』（Kāśikāvyaḥyāna、以下KV）である。

ŚVはミーマーンサー学派における最重要文献の一つであり、これまでに単独あるいは注釈書付きで幾度も刊行されている。しかし、現行の刊本はいずれも偏った地域の写本のみを使用したいわゆるローカル・エディションである。ŚVに対する十全な研究を行うためには、利用可能なすべての写本を使用したクリティカル・エディションを作成することが不可欠である。そのための準備作業としてŚV関係文献の写本について調査・収集を行った。いまだ調査の途上であるが、一応の区切りがついたので、以下、現行の刊本の問題点を指摘するとともに、写本資料の現状について報告したい¹⁾。

2. ŚVおよび諸注釈書の刊本

まず、ŚVおよび諸注釈書の刊本がどのような写本を元に校訂されたのか見ておこう。

(1) ŚVの刊本

1) The Pandit (Kāśīvidyāsudhānidhiḥ), 1878-1879. (以下Pandit版)

1878年から1879にかけてThe Pandit誌に掲載されたŚV最初の出版である。校訂に使用された写本に関する情報はまったく与えられていないが、ヴァラナシのサンプー

ルナーナンド・サンスクリット大学のサラスヴァティー・バヴァナ図書館（Sarasvati Bhavana Library、以下、SBhL）に所蔵されているNo.29631写本が元となっていることは確実である。当該写本には詩節の番号が書き加えられ、現代の出版形式に合わせて表記が変更されている。また、Pandit版の脚注には異読（variant readings）が示されているが、異読はSBhLに所蔵されているNo.29689写本の読みと一致する。したがって、Pandit版に使用された写本はSBhLに所蔵されているの2種の写本と断定してよいだろう。

校訂の元となった2種の写本には読みの相違がほとんどなく同系統である。これらの写本に信頼性がないうえに、Pandit版そのものに誤読や誤植が多く見られる。今日ではPandit版に資料的な価値はない。

2) The Mīmāṃsā-Śloka-Vārtika of Kumārila Bhaṭṭa With the Commentary called Nyāyaratnākara by Pārtha Sārathi Mīśra, Edited by Rāmasāstri Tailanga, The Chowkhambā Sanskrit Series No.3, Chowkhambā Sanskrit Series Office, Benares, 1898-1899. (以下ChSS版)

NR付きの刊本である。サンスクリットの序文（p.6）によれば、ŚV本文の校訂には4種の資料——カーシー（＝ヴァラナシ）のラージャ所有の図書館に所蔵されている2種の写本、上記Pandit版、当時ダルバンガのマハラジャ所有の図書館で司書を務めていたGanganatha Jhaを介して入手した写本——が使用されているという。ヴァラナシの2種の写本については、Pandit版に使用されたものと同一であると考えてよい。4番目の写本について詳細は不明であるが、Notices of Sanskrit Manuscripts（以下NSM）²⁾に報告されているダルバンガのŚV写本かもしれない³⁾。そうだとすれば、現在はダルバンガのカーメーシュヴァル・シン・ダルバンガ・サンスクリット大学（Kameshwar Singh Darbhanga Sanskrit University、以下KSDSU）に所蔵されている可能性が高いが、後述のように同大学所蔵の写本は閲覧困難であり、現状ではなかなか確認できない。

ChSS版は注釈付きのまともな出版としては唯一の完本であるため、これまでの研究において事実上の底本として利用されてきた。しかし、この版にしかない読みも多く見られ、ローカル・エディションの域を出るものではない。

3) The Mīmāṃsāśloka-vārtika with the Commentary Kāśikā of Sucaritamīśra, edited by K. Sāmbaśiva Śāstrī, Part I, Trivandrum Sanskrit Series, No.90, Trivandrum, 1926. (Reprint CBH Publications, Trivandrum, 1990)

The Mīmāṃsāśloka-vārtika with the Commentary Kāśikā of Sucaritamīśra, edited by K. Sāmbaśiva Śāstrī, Part II, Trivandrum Sanskrit Series, No.99, Trivandrum, 1929. (Reprint CBH Publications, Trivandrum, 1990)

The Mīmāṃsāśloka-vārtika of Kumārila Bhaṭṭa with the commentary Kāśikā of Sucaritamīśra, Part III, edited by V. A. Ramaswami Sastri, Trivandrum Sanskrit Series, No.150, Trivandrum, 1943. (以下TSS版)

KT付きの刊本である。出版はPart IIIまでで中断されており、冒頭から Sambandhākṣepavādaまでがカバーされている。この版はKTの出版が主眼であったよう

であり、KTの校訂に使用された写本については詳細な記述があるが、SV本文の校訂に使用された写本については何も触れられていない。ChSS版に見られない読みも散見されるが、写本にもとづくのか、校訂者自身の判断によるのかははっきりしない。出版元のケーララ大学にはSV写本が数種存在するので、それらの写本と照合する必要があるだろう。

4) Ślokaṁkārikā (Tātparyāṁkā) of Bhaṭṭombeka, edited by S. K. Ramanatha Sastri, Madras University Sanskrit Series, University of Madras, 1940, 1971². (以下MUSS版 (a))

TT付きの刊本である。完本ではなく、Sphoṭavādaまでで終わっている。TTの校訂にはチェンナイのアディヤール図書館 (Adyar Library and Research Centre、以下AL) 所蔵のNo.67591写本が使用されているのだが、この写本にはSV本文も含まれており、ChSS版と併せてSV本文の校訂が行われている。なお、ALにはSVのマラーヤラム写本No.67593が存在する。この写本は初版の校訂には使用されていないが、1971年出版の第2版のAppendixにおいて、他の刊本 (Pandit版、ChSS版、TSS版) と併せて異読が示されている。

No.67591写本は南インドのケーララ地方で作成されたマラーヤラム文字の写本であり、ChSS版で利用されている北インドのデーヴァナーガリー写本に見られない読みを多く含んでいる。その意味でも、MUSS版 (a) はChSS版を補完する刊本として利用されている。ただし、AL写本は必ずしも善本とは言えないので、さらに他の写本を参照する必要がある。

5) Ślokaṁkārikā (Śarkarikā) of Bhaṭṭaputra-Jayamiśra, Edited by C. Kunhan Raja, Madras University Sanskrit Series, No.17, University of Madras, 1946. (以下MUSS版 (b))

ŚT付きの刊本である。これも完本ではなく、Ākṛtivādaから始まり、Sambandhākṣepaparihāravādaの第39詩節abまでで終わっている。上述のTT写本No.67591はSphoṭavādaで終わり、その直後にŚTのĀkṛtivādaが始まっている。ŚTにもTTと同様にSV本文が含まれており、ChSS版とともにSV本文の校訂に使用されている。

校訂者であるKunhan Rajaは校訂に際して直接写本を参照することができず、事前に準備されたTranscriptにもとづいて校訂を行ったという。その後オリジナルの写本が参照可能となり、すでに印刷されたテキストはそのままとして、写本の読みとの異同が巻末のNotesに示されている。Kunhan RajaがSV本文について照合したのはŚT写本のみであり、上述のNo.67593写本との照合は行われていない。No.67593写本はTranscriptの段階でも利用されていないようである。

6) Ślokaṁkārikā of Śrī Kumārila Bhaṭṭa With The Commentary Nyāyaratnākara of Śrī Pārthasārathi Miśra, Edited & Revised by Svāmī Dvārikadāsa Śāstrī, Prāchyabhāratī Series-10, Tara Publications, Varanasi, 1978. (以下PBhS版)

NR付きの刊本である。ChSS版が絶版となっているためよく利用されているが、NRを含めてChSS版の丸写しと言ってよい。いくつかChSS版にない読みが見られるが、写本の裏付けは示されていない。

- 7) Bhaṭṭakumārilaviracit Mīmāṃsāśloka-vārttik Hindī Vyākhyā sahit, Vyākhyākār Paṃ, Durgādhār Jhā, Kāmeśvarasiṃha-Darbhaṅga-Saṃskṛt-Viśvavidyāyay, Darbhanga, 1979, 2001².

ヒンディー注付きの刊本である。ŚV本文はChSS版がほぼそのまま使用されている。ChSS版がなく、PBhS版と同じ読みを示す箇所も見られるが、PBhS版と刊行年が近いため、相互関係ははっきりしない。

- 8) Mīmāṃsā Darśana Śloka-vārttika of Kumārilabhaṭṭa with Śābarabhāṣya, the Comn. Nyāyaratnākara and Notes (Vol. I), edited by Dr. Gajānana Śastrī Musalgaonkar, Rameścandra Jaina Granthamāmā, No.1, Bharatiya Vidya Prakashan, Varanasi - Delhi, 1979.

NR付きの刊本であり、Anumānaparicchedaまでを含んでいる。ŚV本文はChSS版をベースとして、既存の刊本（Pandit版、TSS版、MUSS版（a））が利用されているが、写本は使用されていない。

- 9) Kumārilabhaṭṭaviracitam Mīmāṃsāśloka-vārttikam (Bhūṣaṅkhyāṭikāsa-hitam), Ṭikākartā Paṇḍitaratnam Ī. Śa. Varadācāryaḥ, Rāṣṭrīya Saṃskṛtasaṃsthānam, New Delhi, n.d.

現代の学者によるサンスクリット注付きの出版である。カバーしている箇所は冒頭からNimittasūtraまでである。ŚV本文はChSS版とほぼ同一であるが、他の刊本と同じ読みや独自の読みも見られる。

- 10) Śloka-vārttika of Śrī Kumāriḷa Bhaṭṭa With The Commentary Nyāyaratnākara of Śrī Pārthasārathi Mīśra, Edited & Revised by Ganga Sagar Rai, Ratnabhāratī Series-4, Ratna Publications, Varanasi, 1993.

校訂者や出版社が変わっているが、PBhS版の完全なリプリントである。

- 11) Śloka-vārttikam of Kumāriḷa Bhaṭṭa With the Commentary Nyāyaratnākara of Śrī Pārthasārathimīśra Translated into English from the Original Sanskrit Text with Extracts from the Commentaries of Sucarita Mīśra (The Kāśikā) & Pārthasārathi Mīśra (The Nyāyaratnākara), by M. M. Ganganatha Jha, 3 Vols., The Chaukhamba Indological Studies 5, Chaukhamba Sanskrit Prasthithan, Delhi, 2009.

1900年にAsiatic Societyから出版されたGanganatha JhaによるŚVの英訳のリプリントであるが、上段にNR付きのŚVテキスト、下段に英訳が配置されている。テキスト自体はPBhS版を組み換えただけのものである。

ŚVの刊本は11種に上るが、校訂に使用された写本はSBhL所蔵写本2種、おそらくはダルバンガにあったと思われる写本1種、AL所蔵のŚV写本1種とAL所蔵のTT-ST写本に含まれるŚV本文の計5種だけということになる。

(2) TTの刊本

上述のMUSS版（a）に同じ。この刊本は当時TTの唯一の写本と思われていたAL所蔵のマラーヤラム写本No.67591を元に校訂されたものである。

初版のKunhan RajaのForeword (p.i) によれば、TṬの校訂は当時マドラス大学のJunior LecturerであったS. K. Ramanatha Sastriによって着手され、1938年に彼が退職したのを機に、残りの箇所 (p.385以降) の校訂をKunhan Rajaが行ったという。また、第2版のK. Kunjuni RajaのPreface (p.iii) によれば、初版で実際に使用されたのはオリジナルの写本ではなく、事前に転写されたTranscriptである。Transcriptとオリジナルはかなり異なっていたようで、第2版においてオリジナル写本との照合が行われ、Appendixにオリジナルの読みが示されている。

校訂者の一人であるKunhan Rajaが述べているように、この写本は極めて不正確であり、読解不能な箇所も少なくない。

(3) ŚṬの刊本

上述のMUSS版 (b) に同じ。TṬと同様に、当時唯一の写本とされていたAL所蔵の写本No.67591を元に校訂されたものである。ŚṬ写本もTṬ写本と同様に不正確である。

(4) KṬの刊本

上述のTSS版に同じ。刊本に使用された写本はすべてマラヤーラム写本である。刊本のPrefaceには校訂に使用した写本の元の所有者の名前が記されており、1939年に刊行された写本カタログ⁴⁾の記述と照合することによって、ある程度写本を特定することができる。使用された写本は現在すべてケーララ大学の写本図書館 (Oriental Research Institute and Manuscripts Library, University of Kerala、以下ORIMLK) に所蔵されているようである。

Part Iは冒頭からPratyakṣasūtraまでを含む刊本であり、校訂に使用されている写本は4種である。kaと略記されている写本はORIMLK所蔵のNo.C.779写本に間違いはない。khaと略記されている写本は、Part Iの校訂が終了した後に所有者に一旦返却されたが、Part IIの校訂の際には大学の所有となっていたとのことである。Prefaceに示されている所有者名Rāja of Killimanurに該当する名前はカタログに見当たらない。カタログ作成後に大学の所有となったものと考えられる。gaおよびghaと略記されている2種の写本と所有者名が一致する写本はC.766およびC.767である。ただし、C.767はCodanāsūtraからPratyakṣasūtraまでを含む写本なので問題ないが、C.766はカタログによればŚūnyavādaからSambandhākṣepaまでを含む写本であり、本来Part Iをカバーしていない。

Part IIはAutpattikasūtraからŚūnyavādaまでを含む刊本であり、校訂に使用されている写本は2種である。Prefaceにおいてkaという略号で示されている写本はPart Iでkhaと略記されているRāja of Killimanur所有の写本である。khaという略号で示されている写本はC.1398と同一と思われる。ただし、この写本はある程度組版が終わった後に発見されたということもあって、異読は脚注ではなく本文中に括弧付きで示されている。したがって、本文で略号は使用されていない。他にもこの箇所を含む写本が存在するが、Prefaceに挙げられている写本はこの2種のみである。

Part IIIはAnumānaparicchedaからSambandhākṣepavādaまでを含む刊本であり、Prefaceによれば校訂に使用された写本は2種である。1つ目の写本はPart Iでも使用されたC.779と同一の写本と考えられる。この写本はAnumānaparicchedaまでを含んでいる。2つ目の写本はC.625と考えてよい。この写本はAnumānaparicchedaからAphavādaまでを含んでいる。また、

Prefaceによれば、印刷が終了した後に新たな写本が発見されたという。この写本もカタログ作成後に入手したものであり、元の所有者名から写本を特定することはできない。この第3の写本は印刷終了後に入手されたという事情もあって、異読は本文には反映されず、Appendix IIに示されている。

(5) NRの刊本

NRの名を冠した刊本は幾度か出版されているが、ここで取り上げる価値があるのはChSS版だけと言ってよい。ChSS版のサンسكريットの序文（p.6）によれば、校訂には4種の写本資料が使用されているという。それぞれの資料に関する情報も記されているが、情報が古すぎるため写本が現在どこに所蔵されているのかははっきりしない。SBhLには2種のNR写本（No.28968&No.29325）が所蔵されており、これらの写本が使用された可能性は高い。No.29325はChSS版とかなり読みが一致する。また、No.28968は冒頭からPratyakṣasūtraの途中までを含む写本であるが、序文に記されている4番目の写本もPratyakṣasūtraまでと記述されており、同一の写本かもしれない。後述のようにダルバンガのKSDSUにはNR写本が存在する。ŚVと同様にダルバンガの写本が使用された可能性もある。

3. ŚVおよび諸注釈書の写本

ŚVおよび諸注釈書について、現行の刊本がどのような写本資料にもとづいているのかが明らかになった。それでは、刊本に使用された写本を含めてŚV関係文献にはどれほどの写本が存在するのだろうか。New Catalogus Catalogorum⁵⁾を（以下NCC）参照すれば、ある程度の所蔵状況を知ることができる。以下、所在が確認できた写本資料を列挙する。

(1) ŚV写本

これまでに所在が確認できたŚV写本は以下の通りである。

Adyar Library and Research Centre, Chennai

No.67593: Palm-leaf, Malayālam Script, Folios 7a-145b, Pratiñāsūtra v.127a - End.

Anup Sanskrit Library, Bikaner

No.6368: Paper, Devanāgarī Script, Foilos 133, Complete. (Saṃvat 1752)

Asiatic Society, Kolkata

No.G.1090: Paper, Devanāgarī Script, Folios 97, Complete. (Saṃvat 1863)

No.G.8854: Paper, Devanāgarī Script, Folios 79, Complete. (Saṃvat 1642)

No.I.M.2714: Paper, Devanāgarī Script, Foios 1-93b, Beginning - Vedādhikaraṇa v.4d.

No.III.C.23: Paper, Devanāgarī Script, Folios 63, Complete.

Bodleien Library, Oxford University

Wilson No.227a: Paper, Devanāgarī Script, Folios 3a-10b, 22a-37b, Praiñāsūtra v.102c - Pratyakṣasūtra v.87c, Śūnyavāda v.153d - Apohavāda v.32b.

Wilson No.325: Paper, Devanāgarī Script, Folios 27, Complete.

British Library, London

No.1449b: Paper, Devanāgarī Script, Folios 1b-139, 142, Complete.

- No.3739: Paper, Devanāgarī Script, Folios 1-13, 14-79, 80-89, Complete. (Samvat 1914)
DAV College, Chandigarh
- No.4214: Paper, Devanāgarī Script, Folios 18-132, Codanāsūtra v.283d - Vākyādhikaraṇa v.354d.
No.5297: Paper, Devanāgarī Script, Folios 1-17, Beginning - Codanāsūtra v.283d.
Prajñā Pāṭhaśālā Maṇḍala, Wai
- No.6187: Paper, Devanāgarī Script, Folios 113, Complete. (Śaka 1714)
Oriental Research Institute and Manuscripts Library, University of Kerala, Thiruvananthapuram
- No.774A: Palm-leaf, Malayālam Script, Folios 24, Beginning - Autpattikasūtra v.2d.
No.774C: Palm-leaf, Malayālam Script, Folios 14 (by counting), Śabdanityatādhikaraṇa v.440b -
Vākyādhikaraṇa v.357a.
No.19707: Palm-leaf, Malayālam Script, Folios 162-246, 248-267, Anumānapariccheda v.151d -
Vanavāda v.1c.
No.23003: Palm-leaf, Malayālam Script, Folios 65 (by counting), Codanāsūtra v.276a -
Nirāmbanavāda v.46a, Śūnyavāda v.226a - Śabdanityatādhikaraṇa v.2b.
No.L147: Palm-leaf, Malayālam Script, Folios 81-90, Pratiñāsūtra vv.1-128d.
No.C22: Palm-leaf, Malayālam Script, Folios 42, Complete.
- Rajasthan Oriental Research Institute, Alwar
- No.877: Paper, Devanāgarī Script, Folios 91, Complete. (Samvat 1650)
Rashitriya Sanskrit Sansthan (D.U.) Ganganatha Jha Campus, Allahabad
- No.717: Paper, Devanagari Script, Folios 122, up to Ākṛtīvāda.
No.44425a: Paper, Devanagari Script, Folios 1-29, 33-114, Complete.
- Sarasvatī Bhavana Library, Sampūrṇānand Sanskrit University, Varanasi
- No.29184: Paper, Devanāgarī Script, Folios 13, Beginning - Pratyakṣasūtra v.5b.
No.29631: Paper, Devanāgarī Script, Folios 1-60, 63-154, Complete.
No.29635: Paper, Devanāgarī Script, Folios 2-24, Pratiñāsūtra vv.2b-75a.
No.29689: Paper, Devanāgarī Script, Folios 97, Complete.
No.51768: Paper, Devanāgarī Script, Folios 98, Complete. (Śaka 1456)
- University of Mumbai, Itchhārām Suryarām Desāi Collection.
- No.22.2, Paper Devanagari Script, Folios 1-34, 38-122, Complete. (Samvat 1641)
Vangiya Sahitya Parishad, Kolkata
- No.393: Paper, Devanāgarī Script, Folios 53, Beginning - Vanavāda v.52b.
- このうちRashitriya Sanskrit Sansthan Ganganatha Jha Campus所蔵のNo.44425a写本はNCCの出版以降にカタログ化された写本である⁶⁾。また、ORIMLK所蔵のNo.C22写本はクマリーラ作のTantravārttika写本としてカタログに記載されているが、クマリーラ作のŚVとTuptikāを含んでいる。NCCに言及されている写本のなかで、もはや当該の図書館には所蔵されていないもの（例えば、Ānandāśrama、Scindia Oriental Institute）、あるいは実際にはTantravārttikaであるのに誤ってŚVとされているもの（例えば、Rajasthan Oriental Research Institute）が散見された。NCCにはこれら以外にもŚV写本に関する情報が提供されているが、それらについても今後調査したいと考えている。

(2) TT写本

NCC (Vol.XX. p.260) には、ASB. IV. ii. 392-93、National Mus. ND. p.24とある。まず、ASB. にあたって見たのだが⁶、Nos.392-93に相当するのはTTではなく、NR (No.III.C.55&No.I.M.22) であることが判明した⁷。単純にNCCの誤りである。また、National Mus. ND. p.24を見てみると、“Lent by the Adyar Library” という記述があった⁸。どうやらAL写本No.67591はもともと国立博物館に所蔵されていたようである。というわけで、TTに関する限り、存在が確認された写本は以下に示す2種のみである。

Adyar Library and Research Centre, Chennai

No.67591: Palm-leaf, Malayālam Script, Folios 152, Complete.

Sarasvatī Bhavana Library, Sampūrṇānand Sanskrit University, Varanasi

No.29323: Paper, Devanāgarī Script, Folios 2a-114a, 120a-172b, 174a-206a, Complete. (Saṃvat 1564)

2種の写本を比較してみると、デーヴァナーガリー写本の方がマラーヤラム写本よりも明らかに善本である。これにより、現行のテキストの改訂が期待できる。

(3) ŚT写本

TTと同様に、NCC (Vol.XX. p.260) にNational Mus. ND. p.24とあるが、これもAL写本No.67591を指すことは疑いない。したがって、ŚTについても存在が確認できた写本は2種のみである。

Adyar Library and Research Centre, Chennai

No.67591: Palm-leaf, Malayālam Script, Folios 152a-189b, Ākṛtivāda - Sambandhākṣepaparihāravāda.

Sarasvatī Bhavana Library, Sampūrṇānand Sanskrit University, Varanasi

No.93591: Paper, Devanāgarī Script, Folios 1-88, Ākṛtivāda - Śabdanityatādhikaraṇa v.163ab.

TTと同様に、デーヴァナーガリー写本の方がマラーヤラム写本よりも善本であり、現行のテキストの改善が望まれる。また、マラーヤラム写本はSambandhākṣepaparihāravāda v.39abの注釈部分までで終わっているが、デーヴァナーガリー写本はŚabdanityatādhikaraṇa v.163abの注釈部分までをカバーしており、一部ではあるがŚT未出版箇所が利用可能となった。ŚT自体ŚVの最後までカバーしている可能性があり、今後ŚTの完全な写本が発見されることも期待できそうである。

(4) KT写本⁹

出版こそSambandhākṣepavādaで中断しているが、KT自体はŚV全体をカバーしている。刊本ではマラーヤラム写本のみが使用されているが、以下に示すように、デーヴァナーガリー写本も多数存在する。

Adyar Library and Research Centre, Chennai

No.63898: Paper, Devanāgarī Script, Folios 1-39, 1-99, up to Codanāsūtra.

Asiatic Society, Kolkata

No.III.B.99: Paper, Devanāgarī Script, Total Folios 216. Beginning - Śūnyavāda. (Saṃvat 1714)

No.1140: Paper, Devanāgarī Script, Folios 73, Beginning - Codanāsūtra.

Bhandarkar Oriental Research Institute, Pune

No.120 of 1883-1884: Paper, Devanāgarī Script.

DAV College, Chandigarh

No.4159: Paper, Devanāgarī Script, Folios 1-56, Beginning - Codanāsūtra; 1-25 Pratyakṣasūtra

No.5332: Paper, Devanāgarī Script, Folios 62, Śūnyavāda. (Saṃvat 1834)

Government Oriental Manuscripts Library, University of Madras, Chennai

No.R.3602: Palm-leaf, Malayālam Script, Folios 97, Citrākṣepavāda - Sambandhākṣepaparihāravāda.

No.R.3610: Palm-leaf, Malayālam Script, Folios 309, Autpattikasūtra - End.

No.D.4465: Palm-leaf, Malayālam Script, Folios 181, Pratiñāsūtra - Vṛttikāragrantha

Oriental Research Institute and Manuscripts Library, University of Kerala, Thiruvananthapuram

No.C.625: Palm-leaf, Malayālam Script, Folios 188, Anumānapariccheda - Apohavāda.

No.C.766: Palm-leaf, Malayālam Script, Folios 93, Śūnyavāda - Sambandhākṣepavāda.

No.C.767: Palm-leaf, Malayālam Script, Folios 96, Codanāsūtra - Pratyakṣasūtra.

No.C.779: Palm-leaf, Malayālam Script, Folios 95, Beginning - Codanāsūtra, Autpattikasūtra - Anumānapariccheda.

No.C.1333: Palm-leaf, Malayālam Script, Folios 177, Sphoṭavāda - End.

No.C.1398: Palm-leaf, Malayālam Script, Folios 186, Beginning - Śūnyavāda, Vākyādhikaraṇa - Vedādhikaraṇa.

No.C.1779A: Palm-leaf, Malayālam Script, Folios 123, Vanavāda - End.

No.C.1938: Palm-leaf, Malayālam Script, Folios 267, Pratyakṣasūtra - Anumānapariccheda.

No.12435: Palm-leaf, Malayālam Script, Folios 200, Pratiñāsūtra - Sambandhākṣepavāda.

No.16750: Palm-leaf, Malayālam Script, Folios 68, Vanavāda, Vākyādhikaraṇa - End.

No.19672: Palm-leaf, Malayālam Script, Folios 198, Pratiñāsūtra - Pratyakṣasūtra.

Rashitriya Sanskrit Sansthan (D.U.) Ganganatha Jha Campus, Allahabad

No.714/43, Paper, Maithili Script, Folios 180, Beginning - Śūnyavāda.

No.44425b: Paper, Devanagari Script, Folios 2-27, 29-32, Pratiñāsūtra.

Sarasvatī Bhavana Library, Sampūrṇānand Sanskrit University, Varanasi

No.28973: Paper, Devanāgarī Script, Folios 3-39.

No.29032: Paper, Devanāgarī Script, Folios 633, Complete. (Saṃvat 1630)

No.29570: Paper, Devanāgarī Script, Folios 3-159, Nimittasūtra - Śūnyavāda.

No.29704: Paper, Devanāgarī Script, Folios 1-249, 396-410, Beginning - Anumānapariccheda, Citrākṣepaparihārā - Ātmavāda. (Saṃvat 1507)

No.29710: Paper, Devanāgarī Script, Folios 168, Anumānapariccheda - Sambandhākṣepavāda.

No.93318: Paper, Devanāgarī Script, Folios 1, 28-33, 12, 17, 19, Pratiñāsūtra - Codanāsūtra.

No.93659: Paper, Devanāgarī Script, Folios 1-66 +1, 67-157 +1, 90, 61-72, 172, Pratiñāsūtra - Vṛttikāragrantha.

これらの写本 (Manuscript) とは別に写本から転写された Transcript がいくつか存在する。KT の Transcript はすべてマラーヤラム写本からデーヴァナーガリー文字に転写されたものであり、オリジナルの写本がどれに相当するのかもほぼ判明している。

チェンナイの Government Oriental Manuscripts Library (以下 GOML) に以下の 4 種の

Transcriptが存在する。

No.R.2818: Paper, Devanāgarī Script, pp.1-435, Pratijñāsūtra - Nirāmbanavāda.

No.R.3056: Paper, Devanāgarī Script, pp.436-718, Śūnyavāda - Vedādhikaraṇa.

No.R.3233: Paper, Devanāgarī Script, pp.1-610, Anumānapariccheda - Sambandhākṣepaparihāravāda.

No.R.3778: Paper, Devanāgarī Script, pp.611-869, Citrāparihāravāda - Śabdanityatādhikaraṇa.

このうち、R.2818とR.3056の元となった写本はORIMLK所蔵写本C.1398に相当する。このことは写本の元の所有者名（Edappalli Rajah/Rāja of Edappally）およびカバーしている箇所が一致することから明らかである。R.3233とR.3778の元となった写本はGOML所蔵のR.3610写本である。Transcriptには元の写本のフォリオ番号が欄外に付記されているのだが、そのフォリオ番号はR.3610のそれと一致する。R.3610写本は転写された後に一旦返却されたが、後にGOMLの所蔵となっている。R.3610はAutpattikasūtraから始まっているため、R.2818（p.372以降）およびR.3056の重複箇所と照合されたうえで、余白にR.3610の異読が書き込まれている。

ALにも7本のTranscript（Nos.63355-63361）が存在するが、GOML所蔵のTranscriptからの単なる再転写である。

ORIMLKにもTranscript（T327）が存在する。こちらのTranscriptはおそらくは出版の版下作りのために作成されたものであり、上段にŚV本文、下段にKTが配置されている。ĀkṛtivādaまでのTranscriptはすでに印刷に回されたようであり現在は利用できない。残されたTranscriptのうち、AphavādaはORIMLK所蔵のC.625写本からの転写、Vanavāda以降は同じくORIMLK所蔵のC.1333写本からの転写と考えられる。

これまで若干の例外を除いてSphotavāda以降の箇所を含むデーヴァナーガリー写本はSBhL所蔵写本No.29032が唯一のものと思われていた。調査の結果、ダルバンガのKSDSUにSphotavāda以降の箇所を含む写本No.2573が存在することが確認できた。ただし、複写は不可とのことで、閲覧にも制限がかけられたため、Sphotavāda章の一部についてSBhL写本との比較を行うに留まった。この写本はフォリオの数が一致することからNSMに報告されているKT写本と同一であると考えられる¹⁰⁾。KSDSU写本は全体的に見ればSBhL写本に近い。しかし、SBhL写本と異なる読みが見られる箇所では、むしろマラーヤラム系写本と同様の読みを示している。KSDSU写本を全面的に利用できないのが惜まれる。KSDSUのカタログによれば、同大学には以下の4種のKT写本が存在する¹¹⁾。

Raj No.4 (3), Ser. No.2573, Paper, Devanāgarī Script, Folios 207, (Śaka 1653, Folios 1-300 missing).

Raj No.20 (1), Ser. No.2574, Paper, Devanāgarī Script, Folios 788 (Śaka 1821).

Raj No.33 (8), Ser. No.2575, Paper, Maithili Script, Folios 30 (Incomplete).

Raj No.99 (5), Ser. No.2576, Paper, Maithili Script, Folios 29 (Incomplete).

現行の刊本はマラーヤラム写本しか利用されていない。デーヴァナーガリー写本を利用したKTの全面的な改訂と未出版箇所の刊行が急がれる¹²⁾。

(5) NR写本

所在が確認できたNR写本は以下の通りである。

Asiatic Society, Kolkata

No.I.M.22: Paper, Devanāgarī Script, Foios 52a-298b, Pratyakṣasūtra - Vedādhikaraṇa.

- No.III.C.55: Paper, Devanāgarī Script, Foios 1-98a, 108-168, 179, 184-185, 198.
Bhandarkar Oriental Research Institute, Pune
- No.68 of 1907-15: Paper, Devanāgarī Script, Foios 201, Complete. (Samvat 1780)
DAV College, Chandigarh
- No.4855: Paper, Devanāgarī Script, Folios 4a-26b, 56a-147b, Upamānāpariccheda - Vedādhikaraṇa.
No.5344: Paper, Devanāgarī Script, Folios 1b-40b, Beginning - Codanāsūtra.
Sarasvatī Bhavana Library, Sampūrṇānand Sanskrit University, Varanasi
- No.28968: Paper, Devanāgarī Script, Folios 1b-39b, Beginning - Pratyakṣasūtra.
No.29325: Paper, Devanāgarī Script, Folios 1b-280a, Complete.
Government Oriental Manuscripts Library, University of Madras
- No.R5780: Palm-leaf, Telugū Script, Folios 96-154.
University of Mumbai, Itchchārām Suryarām Desāi Collection.
- No.803: Paper, Devanāgarī Script, Folios 1-95, 180-189.
閲覧はできなかったが、ダルバンガのKSDSUに以下の4種のNR写本が存在する¹³⁾。
- Raj No.11, Ser. No.2544, Paper, Devanāgarī Script, Folios 229, (Transcript).
Raj No.126 (2), Ser. No.2545, Paper, Devanāgarī Script, Folios 208, (Folio 1 missing).
Raj No.244 (1), Ser. No.2546, Paper, Devanāgarī Script, Folios 78, (Folios 1-20, 36-55, 76, 77 and 89-94 missing).
Raj No.244 (11), Ser. No.2547, Paper, Devanāgarī Script, Folios 36 (Folios 1-2 missing).
- NRに関する限り、他の註釈書と比べてNR写本の刊本（ChSS版）との相違は大きくない。しかし、未利用の写本を使用したテキストの改善は可能である。

(6) KV写本

KVはKTに対する註釈書であるが、いわゆるṬippanī形式のごく簡単な註釈である。Parameśvaraという名前以外、作者について何も分っていない。年代は、Tattvāvīrbhāva (= Nītitattvāvīrbhāva) に言及していることから、Cidānanda (14世紀)以降ということだけが明らかである。写本はすべてマラーヤラム写本である。おそらくはケーララ地方のみで流布した作品であろうと考えられる。これまでに確認できたKV写本は以下の通りである。

- Government Oriental Manuscripts Library, University of Madras
- No.R3611(a): Palm-leaf, Malayālam Script, Folios 10-47, 52-73, 83-154, Pratiṅṅāsūtra - Śabdānityatādhikaraṇa.
No.R5653(a): Paper, Devanāgarī Script, pp.1-149.
No.D.4465: Palm-leaf, Malayālam Script, Folios 1-3, Pratiṅṅāsūtra.
Oriental Research Institute and Manuscripts Library, University of Kerala, Thiruvananthapuram
- No.C.618: Palm-leaf, Malayālam Script, Folios 1-51, 57-96, Pratiṅṅāsūtra - Vanavāda.
No.10721B: Palm-leaf, Malayālam Script, Folios 6-10, Pratiṅṅāsūtra - Codanāsūtra.
No.T.337: Paper, Devanāgarī Script, pp.1-281, Pratiṅṅāsūtra - Śabdānityatādhikaraṇa.
- まとまった写本はGOMLのR3611(a)とORIMLKのNo.C.618の2種である。GOMLのR5653(a)とORIMLKのNo.T.337は、それぞれNo.R3611 (a) とNo.C.618のTranscriptである。R3611 (a) はKT ad ŚV, Śabdānityatādhikaraṇa v.241aに対する註釈部分までを含んでいる。C.618はカタロ

ゲによれば133フォリオとあるが、確認した限りでは96フォリオである。C.618はVanavādaまでしかカバーしていないが、TranscriptであるT.337はKT ad ŚV, Śabdānityatādhikaraṇa v.426abに対する注釈部分までを含んでいる。Vanavāda以降は失われてしまったようである。いずれの写本にも欠損が見られ、また明らかに他の著作と思われるものが含まれている。R3611 (a) 写本には順序の乱れも見られる。

KVは簡単な写本であるが、時にKTの読解に有益であり、刊行の価値はある。

4. おわりに

ŚV関係文献について現行の刊本の成り立ちと写本の所蔵状況について見てきたが、刊本に不備があることは明らかである。これまで利用されなかった写本資料を元にクリティカル・エディションを作成することが急務である。

注

- 1) 写本資料の収集にあたって、針貝邦生、片岡啓、志田泰盛、川尻洋平、ケーララ大学のP. L. Shajiの各氏より写本の複写・画像データの提供を受けた。記して謝意を表する次第である。筆写はかつてŚVのSphoṭavādaについて当時入手可能であった写本の所蔵状況を報告した。拙稿「クマールラのスポーツ批判——『シュローカ・ヴァールティカ』、「スポーツ・ヴァーダ」章の和訳(1)——」（『鳥根県立国際短期大学紀要』第5号、1998年）pp.22-33参照。今回はその後知りえた情報も含めて、ŚV全体の写本資料の現状について報告しようとするものである。
- 2) Notices of Sanskrit Manuscripts by Rajendralala Mitra and Haraprasada Sastri, 15 Vols., Calcutta, 1871-1911, Reprinted by Sharada Prakashan, Delhi, 1990.
- 3) NSM, No.2296, Vol. VII, pp.73-74.
- 4) A Descriptive Catalogue of Sanskrit Manuscripts in the Curator's Office Library, Trivandrum, Vol. III, Vedānta, Mīmāṃsā and Vyākaraṇa, edited by K. Mahādeva Śāstrī, Trivandrum, 1939, pp.901-908.
- 5) New Catalogus Catalogorum, An Alphabetical Register of Sanskrit and Allied Works and Authors, Volume XX, University of Madras, Chennai, 2011, pp.260-261.
- 6) Descriptive Catalogue of Manuscripts, Volume - XI Darśana-śāstra, Part - II Mīmāṃsā Vedānta, Rastriya Sanskrit Sansthan (Deemed University), Ganganatha Campus, Allahabad, 2012, p.54.
- 7) A Descriptive Catalogue of Sanskrit Manuscripts in the Library of Asiatic Society (The Indian Museum and the Asiatic Society Collections), Volume IV: Philosophy, Part II: Pūrva-Mīmāṃsā, The Asiatic Society, Calcutta, 1969, pp.5-6.
- 8) Descriptive Catalogue of Manuscripts from Indian Collections, National Museum, New Delhi, 1964, p.24.
- 9) ŚabdādhikaraṇaのKT写本について志田泰盛による詳細な分析がある。Taisei Shida, On the Testimonies of the śabda[nityatādhikaraṇa] Section of the Ślokavārttikakāśikāṭīkā, *Journal of Indian and Buddhist Studies*, Vol.61, No.3, 2013, pp.1108(50)-1113(55).
- 10) See NSM, No.2301, Vol. VII, pp.77-78. NSMによればNo.2301写本のはフォリオ数は507であり、KSDSU写本のフォリオ数207 (missing 1-300) と一致する。
- 11) A Descriptive Catalogue of Raj Manuscripts preserved in Kamashwar Singh Sanskrit University compiled by B.R.Sharma, Darbhanga, 1966, p.103.
- 12) KTの未出版箇所のうちAphavādaが片岡啓によって刊行されている。Kei Kataoka, Sucaritamiśra's Critique of *Apoḥa*: A Critical Edition of *Kāśikā* ad *Ślokavārttika apoha* v.1, *The memoirs of Institute for Advanced Studies on Asia*, Vol.165, 2014, pp.362(1)-289(74); A Critical Edition of *Kāśikā* ad *Ślokavārttika apoha* vv.2-94, *The memoirs of Institute for Advanced Studies on Asia*, Vol.167, 2015, pp.466(39)-400(105).
- 13) A Descriptive Catalogue of Raj Manuscripts, op.cit., p.102.

キーワード ミーマンサー学派、シュローカ・ヴァールティカ、写本

(OMAE Futoshi)